

ピラミッド・テキスト：翻訳と注解（2）

塚 本 明 廣

The Pyramid Texts: A Japanese translation with commentary (2)

Akihiro TSUKAMOTO

第33章

(Pyr24)

a wsjr (.)l

オシリスたる王よ

m n.k qbHw.k jpn qb n.k

汝に取れ 汝にとって冷たきこの汝の冷水を

xr Hrw

ホルスと共に

b m rn.k n pr m qbHw

冷水から出る者という汝の名において

m n.k rDw pr jm.k

汝に取れ 汝から出る分泌液を

c rDj=n Hrw xmc n.k nTr.w nb

ホルスは集めた、 汝のために全ての神々を

Dr bw Sm.k jm

そこから汝が去った場所に

d rDj=n Hrw jp n.k ms.w Hrw

ホルスは召集した、 汝のためにホルスの子らを

Dr bw mH=n.k jm

そこで汝が溺れた場所に

(Pyr25)

a wsjr (.)l

オシリスたる王よ

m n.k snTr.k nTr.k

汝の香を汝に取れ、 汝神聖たらんがため

b rDj=n nw.t wn.k m nTr n xft.k

ヌートは汝を汝の敵に対し神たらしめた

m rn.k n nTr

神という汝の名において

c jp Tw Hrw_rnpj rnpw.tj

ホルス・レンピは汝を若いと認める

m rn.k n mw rnpw

新鮮な水という汝の名において

24a,24bにはqbHw、25a,25bにはnTr、25cにはrnpという同音語の意図的反覆(太字)が読み取られる。snTrの語源については、名詞nTr「神」あるいはnTrj「神聖である」の使役動詞からの派生とする説があるというが¹⁾、同音異義語か否かに関係なく、同音の反覆による聴覚的效果あるいは記憶の便に違いはない。いずれにしても、同じ語句および統語法の反復に基づき、24a前半と25aとの並行関係(呼掛けと命令形)は明らかであるが、24a末尾に対応する行は25aにない。24c,24dおよび25bの各前半部の並行関係(rDj=n + 神名)、24b前半部と25b,25cの各後半部との並行関係(m rn.k n ...)も明らかである。その他、24c,24dの各後半部とほぼ同様の定形句が、以下のとおり、Pyr615およびPyr766に見られる。

(Pyr615)//24c'+d'

a	jxmc=n n.k Hrw nTr.w	ホルスは汝のため神々を集めた
b	(N bj;=n.sn jr.k) Dr bw Sm=n.k jm	(彼らは汝に敵対せず) 汝がそこから出た場所に
c	jp=n n.k Hrw nTr.w	ホルスは汝のため神々を集合させた
d	(N bj;=n.sn jr.k) Dr bw mH(=n).k jm	(彼らは汝に敵対せず) 汝がそこで溺れた場所に

(Pyr766)//24b2+c+b2+d

a	m n.k rDw pr jm.k	汝に取れ、汝から出る分泌液を
b	rDj=n Hrw jxmc n.k nTr.w Dr bw nb Sm=n.k jm	ホルスは汝のため全ての神々を集めた そこから汝が去った全ての場所に
c	m n.k rDw pr jm.k	汝に取れ、汝から出る分泌液を
d	rDj=n Hrw jp n.k ms.w.f Dr bw mH(=n).k jm	ホルスは汝のため彼の子らを召集した そこで汝が溺れた場所に

24a jpnは男性・複数形の指示形容詞であり、文字どおりには「これらの」冷水となる。アレンによればqbは動詞qbb「冷える」のStative (pseudoparticiple, old perfective と)² である(A768)。即ち、wnn「ある」やm;「見る」と同型の第II語根重複動詞(2ae geminatae)の活用語幹の一つとする。FEは“you have coolness with Horus”と訳し、名詞「冷たさ」を示唆するかのようである。しかし、FDにはqbHという見出しで自動詞「冷める」と他動詞「冷ます、冷やす」とがあることから、qbHと読まれた可能性もある。³ m rn.k「～の名において」という表現中では、音形上の正確な一致が要求されていると思われるので(上述25bのnTr, 25cのrnpwを参照)、qbよりもqbHwの方が適切であることは明らかであるが、直前の名詞qbHwがその要請を満たしているとするれば、ここでqbを排除する根拠とはならない。ともかく、qbHwについては一般的なmw「水」とは異なるものと考え、拙論では「冷水」とすることで訳し分けた。ナイルの川岸は知らず、内陸の乾燥地帯では素焼きの甕に入れた水が気化熱を奪われて冷やされることは、よく知られている。

24bは神の種々の称号に掛けた呼びかけ。rDw「分泌液」とは難解な単語であるが、時に「汗」時に「血」を意味するようである。上でふれたPyr766a,c以外に現れるrDw「分泌液」を、前稿でふれた箇所も含め(「流出物」という訳を改め)て次に掲げる。これらの文脈の一々については、そのつど検討する予定であるが、再生の象徴であるオシリスは、植物あるいは穀物の化身としての一面を持つこと、オシリス神はセト神に殺され、その身体を切り刻まれてナイル川に捨てられたが、妻である女神イシスがそれを集めて復活させ、彼らの子であるホルスが仇を討つ、という神話も参考になるであろう。⁴

0020c sTj jr.t Hrw jr (N)l pn jdr.s rDw.k

ホルスの目の香りはこの王に、それは汝の分泌液を取り去る

0023a m n.k rDw prj jm.k N wrD jb.k Xr.s

汝から出る分泌液を汝のために取れ

0024b m rn.k n pr m qbHw m n.k rDw pr jm.k

冷水から出る者という汝の名により 汝から出る分泌液を汝のために取れ

- 0308f sfx=n (T)| pn rDw.f m gs; jr t;
この王はゲサー[地名?]で地に彼の分泌液を流した
- 0788b rDw pr m nTr Hw;;.t pr.t m wsjr
神から出た分泌液、オシリスから出た分泌物
- 1146a (M)| pw rDw Hj pr=n (M)| jm xpr n mw
私は流れる分泌液、私は水の創造から出て来た
- 1283b N rDw.k (P)| pw N xmw.k (P)| pw
王よ汝の分泌液はない、王よ汝の分泌物はない
- 1291a mw.k n.k bcH.k n.k rDw.k n.k pr m wsjr
汝の水は汝に、汝の洪水は汝に、オシリスから出た汝の分泌液は汝に[帰す]
- 1360b rDw.k n.k pr m Hw;;.t wsjr
オシリスの分泌物として出た汝の分泌液は汝のもの
- 1865b jr Dr.w rDw.k
汝の分泌液を止めるために

24c nTr.w.k「汝の神々」のkをFEの注に従ってnbの誤記とする。上で言及した異読のbw nb「あらゆる場所」は、「集める」と矛盾するので、nbを削除する。

24c,d rDj=n Hrw xmc, rDj=n Hrw jpは、使役構文であり、文字どおりには「ホルスは集ませた、ホルスは召集させた」となる。場所を表す前置詞のmは移動の意の動詞との結合では「から」の意、移動を示唆しない動詞との結合では「で」の意となる。ドイツ語のinという前置詞が参考になろう。Sm.k jm/mH=n.k jmは、いずれも bw「場所」を修飾する関係節である。mH「溺れる」とは、オシリスが殺されてその遺体がナイル川に流された神話を示唆するのであろう。ゼーテは、24dの「ホルスの(4人の子ら)」についてその神話的系譜関係が成立する歴史的背景を論じる際にこの箇所と言及し、24cのSm「去る」とxmc「集める」とにSmcwつまり「上エジプト」との、24dのmHj「溺れる」にt; mHwつまり「下エジプト」との語呂合せを読込んでいる。⁵

第34章

(Pyr26)

- | | | | | |
|---|--------------------------|-----------|------------------|--------|
| a | zmjn zmjn wpp r; k | Hzmn T; 1 | ズミンズミン汝の口を開くもの | ナトロン1塊 |
| b | h; (.) | | おお王よ | |
| | jdp.k dpt.f xnt zH_nTr.w | Hzmn T; 1 | 汝神々の祠の前でその味を味わえ | ナトロン1塊 |
| c | jSSw Hrw zmjn | Hzmn T; 1 | ホルスが吐くのはズミン | ナトロン1塊 |
| d | jSSw stX zmjn | Hzmn T; 1 | セトが吐くのはズミン | ナトロン1塊 |
| e | tw t jb nb.wj zmjn | Hzmn T; 1 | 二神の心とますはズミン | ナトロン1塊 |
| f | Dd_mdw zp 4 | | 呪文4回 | |
| | Hzmn.k m_cb Sms.w_Hrw | | 汝は清し ホルスの従者達と共に | |
| | Hzmn Smcw nxb T; 5 | | 上エジプトのネケブのナトロン5塊 | |

Nでは呪文中の語句zmjn(語義不明)に呼応した供え物Hzmnを伴っていて、両者の近似音(zmn)による語呂合せを用いた呪文となっている。同一語句のリズミカルな反覆すなわち連禱は、古今東西、宗教的言語

作品に特徴的な表現手段なのであろうか。連禱は次のPyr27、Pyr28だけでなく、Pyr34にも現れ、さらに、遥かに多数の節に跨って繰り返し現れるm n.k 「汝(のため)に取れ」をも含めると、極めて広範に見られる修辭的技術である。

Hzzmn「ナトロン」がミイラ製作に欠かせない物質であったことについては、ルーカスが詳細に論じている。⁶ それによると、ミイラ製作は第4王朝のクフ王の母后であるヘテプヘレスのカノプス(内臓を取めた壺)を最古の決定的証拠と見ることができ、その中にナトロンの希薄溶液が認められたという。であれば、PTの時代には既に技法として確立していたと思われるが、PTにはミイラ製作以前の段階を反映すると思われる本文が⁷、例えばPyr9d(前稿、既出)やPyr29a(本稿、後述)等に伝承されている：

9d	smn.j n.k tp.k jr qs.w	私は汝のため汝の頭を骨の上に据える
12b	[mx;t=n.j n.k r;k jr qs.w.k]	私は汝のため汝の口を汝の骨の上に対し整えた(復元)
29a	swcb.k qs.w.k tmjw	汝は全ての汝の骨を清める

たとえ、現存のミイラが骨と皮の状態であるとしても、製作当初は生前の姿の生き写しが意図されたことは多数の絵画資料が証明している。骨への言及、しかも頭と骨とが切り離された状態への言及はミイラの姿とは直接結びつかず、したがってそれが一般化する以前の別の埋葬法を彷彿させる。

第35章

(Pyr27)

a	snTr.k snTr Hrw	snTr T; 1	汝の香は ホルスの香	香 1 塊
	snTr.k snTr stX	snTr T; 1	汝の香は セトの香	香 1 塊
b	snTr.k snTr DHwtj	snTr T; 1	汝の香は トトの香	香 1 塊
	snTr.k snTr dwn_cnwj	snTr T; 1	汝の香は ドウエン・アンウェイの香	香 1 塊
c	snTr.k DdkT jm.t.sn	snTr T; 1	汝の香はまた 彼らの中に	香 1 塊
d	r;k r; n bHz jrT.tj hrw ms.f jm		汝の口は 生まれたその日に乳を吸う子牛の口	
e	snTr mHw St_p.t T; 5		下エジプトのシェトペトの香5 塊	

第36章

(Pyr28)

a	snTr.k snTr Hrw	汝の香は ホルスの香
	snTr.k snTr stX	汝の香は セトの香
	snTr.k snTr DHwtj	汝の香は トトの香
b	snTr.k snTr dwn_cnwj	汝の香は ドウエン・アンウェイの香
	snTr.k snTr k;k	汝の香は 汝のカーの香
	snTr.k snTr snTr.k	汝の香は 汝の香の香
c	snTr.k DdT pn jm.t sn.w.k nTr.w	この汝の香はまた 汝の兄弟たる神々の中に

27a,bと28a,b1との並行関係は明白であるが、供物への言及はWになく、Nの本文のみにある。27と28に頻出するsnTrは元々「香」を意味し、そこから「香による浄め」という語義が派生した。過去から現在に至るまで、また葬祭儀礼に止まらず日常生活においても、「香」の果たす役割はあらゆる文化

に無縁なものではない。古代エジプトの香については、その物質文明全般を自然科学者の目で分析したルーカスに詳細な記述が見られるが⁷、本稿では、彼の成果を基礎にして古代イスラエルの祭儀における香を論じたニールセン(K.Nielsen)に従いながら、簡単に紹介しておく。まず考古学的研究成果として、香と思われる副葬品が既に先王朝時代の墳墓から出ること、手持ち式の香炉は第五王朝以降に出現すること、据え置き式の香炉台は現れないこと等が述べられる。次にPT本文に基づくと、ミイラ製作以前の段階では香が不可欠であったこと(第632章Pyr1790)、香の浄化作用とセトに象徴される害悪からの保護(第29章Pyr20,21[既出])、浄化が王を聖別する(第741章Pyr2271)とは言え、それは祭司の祭式行為とそれに伴う呪文とによって初めて効力を発揮するものであった。snTrは故王を神々と同じ香に包むことで神々の受け入れ易い存在としたのである(第412章Pyr730,第508章Pyr1114)。しかし、王の昇天を助けるのは、香の芳香ではなく、階段に響えられた香の煙であった(第267章Pyr365,第684章Pyr2053,第269章Pyr376-380)。「香」に当る単語として他にcntjwがあり、PTにも言及がある(第347章Pyr563)。⁸ しかしその用例は、次のように極めて少ない。

W0512b Szp (W) | cntjw cnj.f m cntjw cn.t (W) | m cntjw

「王はcntjwを受取り、彼の鼻腔はcntjwで満ち、彼の爪はcntjwで満ちる」

N0563a r; n (N) | m snTr sp.tj (N) | m cntjw

「王の口はsnTrの如く、王の両唇はcntjwの如し」

ルーカスおよびニールセンの結論に従えば、狭義にはsnTrがテレピンの樹脂、cntjwがBursaceae科の樹脂の総称とされるが、どちらも香の代表格として広義に香一般を意味したということである。因みに、エジプトで発展したキリスト教であるコプト教の聖歌抜粋の中でも「芳香」sthoinoufi (ボハイラ方言形、語源は古代エジプト語のsTj nfr「良い香」)は特別な効能を持つ物として歌われている。⁹

27および28のHrw, stX, DHwtj, dwn_cnwjは、すべて神格。ホルスは鷹の姿、セトは山犬の姿、トトはトキの姿、ドゥエン・アンウェイは鳥の姿で表される。

27c DdkTはDdk > DdTの音韻変化の痕をそのまま残した綴りである(E111)。¹⁰ その新しい形式であるDdTが直後の28cに現れているが、その際、名詞とその指示詞との間に位置する点に注意。k > Tへの音韻変化以前の形式は既にPyr22b kb.wj.k「汝のサンダル」(双数)に現れていた。このように新旧両形式あるいは南北の方言形¹¹が並んで現れる点が、PTの言語特徴の一つである。

27dは、その子牛のように「無垢」だと言いたいのであろう。

(Pyr29)

a snTr.k tp r; k

汝の香は 汝の口の上に[あり]

scb.k qs.w.k tmjw

汝は全ての汝の骨を清める

Htm.k jrj.t.k

汝は汝に属するものを備える

b wsjr

オシリスよ

Dj=n.j n.k jr.t Hrw

私はホルスの目を汝に与えた

Htm=tw Hr.k jm.s pDpD

それにより汝の顔は飾られ、潤う

c snTr T; 1

香 1塊

29a 「骨ども(qs.w)を～する」という表現は、他には、次の箇所にも例証される。

0530a wcb jr (T)| Szp.f n.f qs.w.f bj;

「王は清い。彼は彼の鉄の骨を彼のために受け取る。」

0828b jcb.s n.k qs.w.k dmD.s n.k c.t.k

0835b jcb.s n.k qs.w.k dmD.s n.k c.t.k

「彼女(女神)は汝のため汝の骨を集める。彼女は汝のため汝の肢体を集める。」

0840b jcb n.k qs.w.k Szp n.k tp.k xr gb

「汝のため汝の骨を集めよ、汝のため汝の頭を受け取れ、とゲブは言う。」

0843a Szp n.k tp.k jcb n.k qs.w.k xr gb

「汝のため汝の頭を受け取れ、汝のため汝の骨を集めよ、とゲブは言う。」

29b後半は、jr.t Hrw「ホルスの眼」の修飾節である。jr.t Hrwの出現箇所は(同一定形句を含めると)のべ数で292に達し、その内214例が第133節までに現れる。(一部に異文を含む)定形句の行を重複して数えない場合、全154例中の113例が第133節までに出現する。その内、はっきりと双数(dual)が現われるのは、ゼーテ底本では33a,69b,71aの僅か3箇所に過ぎない。FPTの補遺を加えるとさらに3例が追加できる(Nt0040+1,Nt0040+5,Nt0040+10)。これは、ホルスが父オシリスの遺骸を奪い返そうとしてセトと争った時に、みずからの片目を失ったという神話と関連付けることができるかもしれない。¹² すると、双数は戦い以前のホルスを想定しているのであろうか。「ホルスの眼」と共起する語句は種々であるが、以下のような語句と結合する。

jr.t Hrw「ホルスの目」とは：

色は白い(0033a,b,0048a,0048b,0096a,0108b)か黒い(0033a,b)か、緑色(0096c,0107a,0108c,1202c)または赤色(1202c)であり、故に、それぞれ上エジプトまたは下エジプトを象徴する白冠(0900a-b,1234b)または赤冠(0901a)を指し、それらの王冠の中にあるもの(0056b[デブ冠、ネト冠])である。

したがってそれは、衣服のように着、纏い、被り、飾り、織り、剥ぎ取られるものであり(0040b,0096a,0096c,0097a,0097c,0108b,0108c,0109b,0737c,0901a,1202c,1234b,1239b,1642a)、とりわけ顔につけて(0018c)眉とし(0054a)、顔を飾る(0029b,0061c)ものとなる。しかしまた、外れ落ち、滴り、零れ、引き抜かれる(0040a,0060c,0073c,0077a,0078c,0086e,0087a,0094a,0133a,0695a,0947a)ものである。

一方、それは焚かれて(0076a,0095a,0108a)、芳香を放ち(0018d,0019a,0019b,0020c,0029b,0116d)、甘く(0100a,0111a,0591c)、清らかで(0072c[口を清める],0308e[王を清める],0312e,1277d)健全な[?](0021a,0054c,0055a,1642a)ものであって、時にパンまたは菓子 of 代名詞となる(0063c,0078a,0117a)。

よって、水と有縁であり(0010a[水,nms.t 壺],0043a[中の水],0043b,0047b,0088a[水を搾り出す],0094c[湧き出る],0107b,0133a[滴る],0594b[水路の向うに噴き上げる],0594e,0695a)、また口とも有縁であって([口に置き]:0031a,0036a,0077c;[口が開き]0039a,0093c;[口を開けるもの]:0063a,0106b)、そのxpxで(0012c)あるいは瞳によって(0093a)口が開くものである。要するに、食物として食べられ、嘔まれ、呑まれ、吸われ、吐かれ、舐められ、味わわれるものである(0038a,0060a,0061a,0072e,0088c,0092c,0098c,0104b,0118b,1450b,1460b)。したがってそれは、活力・気力を与え(0022b,0064b,0113a)、助けるもの(0051c)、肉体に救いを与えるもの(1241a)であると共に、恐れ・苦痛・痛みを生じるもの(0051a,0074e,0086c,1040d)である。

それは、探し回り(0038c,0080c,0600c,1242a[苦勞して])、争奪し(0036a,0039a,0061b,0073a,0089c)、時に驅し取って(0099c,0105a)、運び(0020a,0085c)、齎らされ(0051c,0054a,0846b,1235d,1237e)、分配・割当てられ(0087c,0100c,0109a,0216c)、何度となく「取れ」という表現が繰り返された後(0021b,0035b,0040a,0051b,0060b,0061b,0061c,0064d,0073a,0079c,0081a,0082c,0083a,0083c,0084a,0085c,0089a,0089c,0095c,0098a,0099c,0100c,0104a,0105a,0109a,0110a,0117c,0133a,0216c,0600c,0695a,0831a,0844b)、与えられ(0018c,0021b,0029b,0058c,0066a,0105a,0109a,0216c,0830b,1068c)、受け取られ(0844b,1354b)、所属し所有され(0021a,0115b,0591c,1068c,1407b)、持つ者に満足を与える(0058c,0059a,0059c)。

他方、それは安らかに目覚め(0056b)、トトの羽先で煌きながら(0976a)現れ(0058b)挨拶し(0758a)、また挨拶を受けながら(1588a)、十日祭(十日毎の儀式)に訪れる(1067c)存在でもある。それは天の東側に落ち、跳び起き(0076c,0947a)、呼び戻される(0046a)。それは、次のように宣言する存在であり：「我 jr.t Hrwとして発つ」(0976d)「蛇は天へ向かうが 我は jr.t Hrwである」(0976c)、また次のように宣言される存在でもある：「我(黄泉に渡るための)船無き者にあらず、我 jr.t Hrwを持つ故(1429e)、 jr.t Hrw が我と共に汝の許に来るよう(1243c)、 jr.t Hrw が吐き出される前に生まれた者(1463e)。

以上、「ホルスの目」に関する修飾語句の網羅からは、正体を掴み難い印象があるものの、供物との強い関連があることは間違いないであろう。特に後述のPyr35bには、王のカー(魂)への供物を言換えたと思われる箇所がある。上述のニールセンによる香の考察中にもその参照箇所に「ホルスの目」が含まれていて、彼はあらゆる善の象徴、一種の summum bonum と呼んでいる。¹³ ところで彼は、古代イスラエルの動物犠牲をエジプトの影響と見るにも拘わらず、古代イスラエルの祭儀においてその存在を推測した香辛料については、エジプトに関して明言していない。しかし、上の様々な規定箇所を見渡すと、香に限らず、香辛料およびそれらを用いた供物としての食物を象徴すると見なすこともできそうである。因みに白・黒・赤・緑という基本色と思しき4色に関連しては、ショーレムおよび細川を参照。¹⁴ これに類似した語結合として、次の用例が例証されるものの、用例数が極めて僅かである上、字義どおりの「目」を指す場合もある。これに反し、 jr.t Hrw にはその種の明確な用法はない。

(1) jr.t rc 「ラアの眼」：

0124a x.t n.j sftw x.t n.j sftw x.t jmj jr.t rc

我に食物を屠殺人よ、我に食物を屠殺人よ、食物を、ラアの眼の中にいる者よ

0698d (.)| pw jr.t tw nt rc/(N:Hrw) sDr.t jj.t/(P:jwr.t) ms.t rc_nb

我こそはラア(異文:ホルス)のあの眼なり、夜を過ごし、毎日受胎され、生れる者

1231b jSw.k r.f (.)| pn jr p.t jr.t rc js

汝ラアの眼の如く天へと昇らんことを

(2) jr.t nTr 「神の眼」：

0124b x.t n.j wHc jmj jr.t nTr wdpw cb; mw

我に食物を神の眼の中にいる鳥飼よ、屠殺人よ、水を運べ

0124e jx.t n.j jtm jx.t n.j jtm jx.t n.j jmj jr.t wj;_nTr

我に食物をアトムよ、我に食物をアトムよ、我に食物を、神の聖船の眼の中にいる者よ

0900c Dj.s Sc.t.k (.)| pw m jr.tj nTr.w nb

(女神が)汝への怖れを全ての神々の両目に投じますよう

同様に、これとの関連で言及すべき語結合に Xr.wj stX 「セト(オシリスの殺害者、ホルスの敵役)の擧丸

(文字どおりの意味は下にある二つのもの)」が7箇所て例証される:0142b,0418a,0535b[供物を示唆],0594a;[次の3箇所ではホルスの目と対応]:0679d,0946c,1463e。ここでは、敵対関係にあるホルスとセトとを身体の上部と下部とで対比させていることは明らかである。

(Pyr30)

第37章

a	h; (.)	おお 王よ
	j smn.j n.k cr.t.k psS.t	汝のため我は繋ぐ、離れた汝の顎を
	psS_kf	ペセシュ・ケフの鉤

第38章

b	wsjr (.)	オシリスたる 王よ
	w p.j n.k r;k	汝のため我は開く、汝の口を
	b j;_nTr_Smcw 1	上エジプトの神鉄 1
	b j;_nTr_mHw 1	下エジプトの神鉄 1

30b b j;_nTrをフォークナーは、FEでは“god’s iron”と訳すのに対して、FDでは“a mineral (not metal)”との訳語を掲げ、そこで「上エジプトのピア」、下エジプトのピア」という語句に言及している。エジプトが鉄器時代に入るのは紀元前15世紀以降のことであることを考慮すると、FDの方が妥当と思えるものの、鉱物学的観点から具体的事例に詳細な検討を加えているルーカスによれば、隕鉄などにより鉄の存在自体が知られていなかった訳ではなく、また使用範囲は限られていたにしても、道具として加工された例も皆無ではない。とりわけ、遙か後代とは言え30aに言及されたpsS-kf(ミイラ再生のための重要儀礼である開口の儀で使用される鉤)の鉄製のものが発見されているからには、宗教用の祭器として古くから存在した可能性は否定できない。当時、鉄が希少な貴重品であったとあらば、なおのことである。¹⁵したがって、鉄が日常的に一般に使用されていなかったということは、ここでの言及を鉄ではないとする確かな根拠とならない(もっとも、下でふれるP1293a,P1301bの限定符は不定形の鉱滓を思わせるものであり、精錬によって得られる成型されたインゴットとは思えない)。同じFDには同音異義語としてb j; “bronze(?)”という項目を別に立てる。FDの掲げる綴りを比較すると、2語は限定符により明白に書き分けられている。

b j; “bronze(?)” : b j;`n21[b j;], b j;`n21[b j;1]`o39`n333, b j[b j;]`o39

b j; “a mineral” : [b j;]b`n37, [b j;]b`n14, [b j;]b[b j;1]`n14, b[b j;]t, b[b j;3][b j;1]`n33`z02

即ち、青銅は限定符として`n21または`o39を伴い、ミネラルは`n37または`n14を伴う。`o39と`n37の違いは字形の長短の違いに過ぎず、いずれとも判断し難い場合があるが、表音文字の使用法が異なる。即ち、青銅は1子音文字に多子音文字を補うのに対し、ミネラルは逆である。ただし、英訳のmineralを鉱物一般ととれば青銅あるいは鉄を含むことも可能であるから、フォークナーによる訳語の関係は明瞭ではない。PTには[b j;1]=F18(ガーディナー「字書」コード)や[b j;3]=W10を伴う表記は例証されない。30bの綴りは<b[b j;]`n34>(3例)である。また数詞1の表記にはインゴットらしき`o39が使用されている。綴りから判断する限り、古典エジプト語における青銅の表記に近い。他にFEが“iron”と訳す箇所にPyr.800dがあり、<b[b j;][b j;2];j,異文b[b j;][b j;2];w>と綴られる。因みに同じ綴りが801aでは同音異義

語の「移す」を意味する。いずれにしる多子音文字[bj;2]=U16を用いた綴りが現れるのは、PT中に3ヶ所しかない(下表の*印)。800dと同じく“iron throne”という語句が現れるPyr.P1293a,P1301bでは<b[bj;]`n349(j)>と、30bと表音部分が同じ構成で限定符が異なる綴りが2例現れる。[bj;2]の異体を用いる綴りは他にはPyr.647aPに<b[bj;][bj;2]>が1例あるが、そこでは同音異義語の「逃れる」を意味する。またこれは<b[bj;]`n341`u15>の可能性もある。[bj;2]=U16自体がU15との組み合わせ文字だからであり、ガーディナーは表語文字[bj;j]「銅」を示唆している。さらに、T/M/Nの並行本文は<b[bj;]`n34>およびその限定符の異体字であって、[bj;2]を使用しない。いずれにしる、bj;という語形はPTに頻出するにも拘わらず(のべ73例)、[bj;2]を使う例は、極めて少ない。

その他の例証箇所も含めbj;という語の表記および出現箇所を次に表示する。後述の理由に基づき、限定符と思しきN34とN33のみが異なる綴りを対比して表示する。訳語はフォークナーに従っておく。

		N34		N33
“iron”	1	b	N34	
	15	b[bj;]	N34	2 b[bj;] N33
	4	b[bj;]	N34 ;	2 b[bj;] N33 ;
	4	b[bj;]	N34 j	1 b[bj;] N33 j
	2	b[bj;]	N34 w	1 b[bj;] N33 w
	1	b[bj;]	N34 x3	2 b[bj;] N33 x3
	3	b[bj;]	;j	
	1	b[bj;]	N34 ;j	
	*1	b[bj;]	U16 ;j~b[bj;][bj;2];j	
	1	b[bj;]	N34 ;t	
	1	b[bj;];	N34 t	
	1	b[bj;]	N34 `n25	
	1	b[bj;]	N34 `o39	
	“escape”	8	b[bj;]	N34
1		b[bj;]	N34 ;	1 b[bj;] N33 ;
1		b[bj;]	w N34	
*1		b[bj;]	N34 U16~b[bj;]N34[bj;2]	
1		jb[bj;]	N34 ;	
				1 jb[bj;]; N33
1	b[bj;]	t		
“move” etc.	3	b[bj;]	N34	1 b[bj;] N33
	1	b[bj;]	N34 ;j	
	*1	b[bj;]	U16 ;j~b[bj;][bj;2];j	
	1	b[bj;];	N34	

以上、破損本文を除くと、FEが“iron”と訳す箇所が44例、“escape”と訳す箇所が17例、“move”

その他と訳す箇所が7例ある。ただし、表に揚げた数値は異体字の細かい違いを無視したものである。並行本文でN33とN34とが交代することと、N34の異体字の中にN33と紛らわしい字形があることを考慮して、両者を異体字の関係にあるとみることもできる。次の表はN33をN34の異体字として処理したものである。

	“iron”	“escape”	“move” etc.
b[bj:] N34	17	10	4
b[bj:] N34 ;	6	2	
b[bj:] N34 j	5		
b[bj:] N34 w	3		
b[bj:] ;j	3		
b[bj:] N34 ;j	1		1
b[bj:] U16 ;j	1		1
b[bj:] N34 ;t	1		
b[bj:]; N34 t	1		
b[bj:]; N34			1
b[bj:]t		1	
b[bj:]w N34		1	
b[bj:] N34 U16		1	
jb[bj:] N34 ;		1	
jb[bj:]; N33		1	
b N34	1		
b[bj:] N34 `n25	1		
b[bj:] N34 `o39	1		
b[bj:] N34 x3	3		

上の表から明らかなように、出現数の多い綴りは語義に関わりなく広く用いられている。用例数が少ない綴りについては、特定単語専用の綴りとして互いに書き分けられていたか否かを判断することはできない。言換えれば、文脈から特定する他ない多義的表記ということになる。多様な綴りが使用された中で、例えば表音文字[bj:2]=U16(とその異体字)はかなり特異な文字であるが、これさえも3語(見方によっては2語)に均等に1回ずつ使われている。このように、多くの場合書き分けはなかったと思われる中で、jb[bj:]だけは動詞の表記に限定された可能性が高い。また、最後の4例の内1例のみはN34をbj:と読ませる点で、表語文字に頭音のbを振った表記<b[bj:]>と見られ、続く2例は限定符`n25=「山」`o39=「石」による「鉱物」の示唆と見られる。とは言え、「逃れる、移動する」を意味する動詞の限定符にN34「青銅塊」が使用される理由が不明である。この用法を説明するには、ガーディナーに言及はないものの、[bj:]の音価をもつN34の表音文字としての用法を新たに追加すべきであろう。

(Pyr31)

第39章

a (.)|

王よ

m n.k jr.t Hrw jz.t.f r.s	汝に取れ そのために彼が去るホルスの目を
jn.j n.k sj	私は汝の許にそれを運ぶ
dj.j n.k sj m r;.k	私は汝のため 汝の口にそれを置く
b zrw_Smcw zrw_mHw`	上エジプトのzrw 下エジプトのzrw
第40章	
c h; (.)	おお 王よ
m n.k Sjk wsjr	汝に取れ オシリスのSjkを
Sjk	Sjk

31bのzrwは語義不明の語であるが、31aにz,sやrの音を多く含むことに関連づけていることは明らかであろう。31cのSjkも語義不明であるが、これも本文のSjkと供物のSjkとの同音に呪術的効力を期待した呪文となっている。以下、Pyr40まで飲食物が捧げられる。

(Pyr32)

第41章	
a jmj tp n mnnD n Hrw n Dt.f	取れ ホルス自身の胸乳の先を
jmj n.k jrj r;.k	取れ 汝のため 汝の口のためのものを
jrT.t_mr l	ミルク壺の牛乳 1 壺
第42章	
b jmj mnD sn.t.k ;s.t	取れ 汝の姉妹イシスの胸を
bz;.t jT.k r r;.k	汝が汝の口に取るブザートを
mnz;_Sw	空のメンザー壺 1 壺

32aWの異文は mr「ミルク壺」を伴わないが、限定符は「ミルク壺」特有の形を明示している。

32bのbz;.tも語義不明であるが、32aではmnDDと綴られた32bのmnDとの並行から「胸乳」に近い語義を持つと思われる。供物のmnz;との語呂合せのためにbz;.tという稀な単語を使ったとも考えられる。

第43章

(Pyr33)

a m jr.tj Hrw km.t HD.t	取れ 黒と白とのホルスの両眼を
jTj n.k sn r mxnt.k	それらを汝のために攫え 汝の額へと
sHD.sn Hr.k	それらは飾る 汝の顔を
b HD km f;j.t	白壺 黒壺 捧げ
h;Ts mnw_HD jr.t jmn.t	白メヌー石のハーチェス壺は 右目
mnw_km jr.t j;b	黒メヌー石の(ハーチェス壺は) 左目

33a 右目と左目との色が異なるという感覚は理解し難いが、対照的な組合せで一对という感覚であろうか。「目」の双数(jr.tj)の使用自体が稀であることは23bで既に述べた。

33bの訳語中の「壺」は限定符から補われたものである。短い異文はW、長い異文はNである。

第44章

(Pyr34)

a Htp n.k rc jm p.t sHtp.f n.k nb.wj	天のラアは汝に恵み深い 彼は汝のため二神を宥める
b Htp n.k grH Htp n.k nb.tj	夜は汝に恵み深い 二柱の女神は汝に恵み深い
c Htp.t jnj.t n.k Htp.t m;;.t.k Htp.t sDm.t.k	恵みは 汝に運ばれたもの 恵みは 汝が見るもの 恵みは 汝が聞くもの
d Htp.t m_b;H.k Htp.t m_xt.k Htp.t xrt.k p;;t wD;.t	恵みは 汝の前に 恵みは 汝の後に 恵みは 汝と共に 完璧なパート菓子

各行冒頭のHtp(.t)という語から宗教文書特有の連禱の効果が齎されている。

34a,b FEが指摘するとおり、a,bの意味的対比は明白であるが、34a2でHtpでなくsHtpとする点が難解である。意味的には34b2との均衡を壊すことになるが、音節数で34a1と一致させたのであろうか。

34c FEに従い、そのままでは意味をなさない原文のjnt ntkを、受身分詞を用いたjnj.t n.kと訂正する。34d FEはwD;.tを‘fresh’と訳しているが、w;Dと混同したと思われる。¹⁶

(Pyr35)

第45章

a wsjr (.) m n.k jbH.w Hrw HD.w Htm.w r;.k HD T; 5	オシリスたる王よ 汝に取れ 汝の口を飾る白いホルスの歯を タマネギ 5把
--	--

第46章

b Dd_mdw zp 4 Htp_Dj_nsw.t n k; n (.) wsjr (.) m n.k jr.t Hrw	呪文4回 王のカーに捧げる王の供物 オシリスたる王よ 汝に取れホルスの目を
c p;.t.k wn.k p;.t nt wdn	汝が食べる汝のパート菓子を 供物のパート菓子

35a HD字義どおりには「白いもの」を「タマネギ」と訳したのはFEに従ったのである。FEに特に注記があるのではなく、文字表記からも判断できないが、副葬品に含まれているのかもしれない。というのは、ルーカスによれば、ミイラの体内からタマネギが見つかる例は少なくないからである。¹⁷

35cの異読にp;.t nt wD;.t「完璧のパート菓子」がある。間接属格表示のntの存在からここが名詞であることは確実であるが、34dは直前の名詞p;.tに性・数が一致した形容詞であるか、直接属格構成の後部要素である女性・単数名詞であるかは断定できない。

(Pyr36)

第47章

a	wsjr (.) m n.k jr.t Hrw hp.t m_c stX jT.t.k jr r;.k	オシリスたる王よ 汝に取れ ホルス目を セトから奪い 汝が汝の口へ運び
b	wpp.t.k r;.k jm.s jrp h;Ts mnw_HD 1	それにより汝が汝の口を開くべき(目を) ワイン 白メヌー石のハーチェス壺 1個

第48章

c	wsjr (.) wp r;.k m mHt jm.k jrp h;Ts mnw_km 1	オシリスたる王よ 汝の口は 一杯に開く ワイン 黒メヌー石のハーチェス壺 1個
---	---	---

36a アレンによれば、hp.tは39aのhp.tと同様、動詞 hp ‘escape’ の能動分詞単数形(A760.A)、jT.tと36bのwpp.tとは動詞jTjとwpjとの関係詞形(A780.D)となり、hp.tのみが文法的に異なっている。しかし、関係詞形はその先行詞が関係節の主語となる場合に主語の省略が可能であるから¹⁸、3形式とも同じ関係節形と考えることもできる。FEの ‘which was wrested from’ との訳は、そのことを踏まえたものであろう。

36cのwpはアレンでは動詞wpjのsDm.f受動形(A777.B)であるが、FEは能動形に訳している。このように能動形と受動形との区別が、古代エジプト語では語形式により明示されない場合が多い。これは、母音を明示しないというエジプト文字の特性が原因である。その明記されない母音体系およびそこを突破口の一つとして文法体系を解明するために、コプト語から遡ることによる歴史言語学的な再建およびアフロアジア比較言語学による再建が必要となるのである。

(Pyr37)

第49章

a	wsjr (.) m n.k Hnq pr jm.k Hnq.t Hnt mnw_km 1	オシリスたる王よ 汝に取れ 汝から出る醗酵物を ビール 黒メヌー石のケネト鉢 1鉢
---	---	---

第50章

b	rc dw;w.k jm p.t dw;w.k n (.) nb x.t nb	ラアよ 汝の輝きは天に[あり] 汝の輝きは万象の主たる王のために[あり]
c	n Dt.k x.t nb n k; (.) x.t nb n Dt.f x.t nb	万象は汝自身に[属す] 万象は王のカーに[属す] 万象は彼自身に[属す]
d	f;.t xft Hr.f wdHw Dsr.t	彼の面前で聖なる供物を捧げ持つべし

37b1,37c1 に関し、FEは条件節として ‘if’ を補い、‘if you dawn in the sky’, ‘if all things

belong to you' と訳す。ここの文脈から読み取られるとおり、王とオシリスとは一体であり、またラアとも一体であるので、拙訳が可能である。翻訳者が原文にないニュアンスを読み過ぎない用心のためには、必ずしも接続詞を必要としない日本語の特色を最大限に生かすべきである。なぜなら、文間の論理的关系を明示するという接続詞の機能そのものが、他方で原文の意図せぬ解釈を持ちこむという結果を齎すからである。もつとも、明確な伝達からは程遠い曖昧な解釈という代償を払わされることになる。¹⁹

Pyr34と同様の連禱が、37bのdw:w.kや37cのn Dt.kそして37b~cに掛けてのx.t nbの繰り返しに見られる。

(Pyr38)

第51章

a (.) | m n.k jr.t Hrw dpj.t.k | dpt 王よ汝に取れ、汝が味わうべきホルスの目を | デベト菓子 1個

第52章

b H; H;j kkj | ;H 弔う者よ闇の後に控える者よ | アハ・パン 1個

第53章

c (.) | m n.k jr.t Hrw zxn.tj.k | zxn 王よ汝に取れ、汝が抱かれるホルスの目を | ゼケン肉 1塊

38b H;jは前置詞のH;「の後」から派生したニスバ形容詞またはその実詞化した名詞である。エジプト語独特のこの語形成については、アレンを参照。²⁰

(Pyr39)

第54章

a (.) | m n.k jr.t Hrw 王よ
hp.t m_c stX 汝に取れ ホルスの目を
nHm.t n.k セトから奪われ
wp r;k jm.s 汝のために守られた(目を)
それにて汝の口が開くよう
b jrp Hnt mnw_HD 1 ワイン 白メヌー石のヘネト鉢 1鉢

第55章

c (.) | m n.k Hnq pr m wsjr | 王よ
Hnq.t Hnt mnw_km 1 汝に取れ オシリスから出る醗酵物を |
ビール、黒メヌー石のヘネト鉢 1鉢

39a hp.tをアレンは、36aと同様、hp 'escape' の能動分詞(760.A)、nHm.tは36aの関係詞形 jT.tと異なり、しかし40aと同様、動詞 'take away' の受動分詞単数形(A775.B)とする。wpについては、アレンがwpjの命令形(A779)とするのに対し、FEは“your mouth is split open”と訳す。36cのwpを参照。39b Wのjrp「ワイン」に対しNはHnq.t「ビール」という異文を示す。対照的な事物の一組を一對とするか、同一物の一組を一對とするかでこのような異文が生じるのであろう。Pyr33の白と黒とを参照。

(Pyr40)

第56章

a (.)	王よ
m n.k jr.t Hrw nHm.t n.k	汝に取れ 汝のために救われたホルスの目を
N bj;=n.s jr.k	それは汝から逃れない
Hnq.t Hnt bj;	ビール、鉄のヘネト鉢 1鉢

第57章

b (.)	王よ
m n.k jr.t Hrw Htm Tw jm.s	汝に取れ ホルスの目を それで汝を飾れ
Hnq.t Hnt Htm	ビール、ヘテムのヘネト鉢 1鉢

太字部分に語呂合せがある。40aのbj;については、Pyr30で上述。

第57A-57I章については、下記、第71D章を参照されたい。

第57J-57S章

(Pyr40+=FE 40+10~40+19)

a wsjr (.) jn.j n.k jr.tj Hrw pD.t jb ///	///
b wsjr (.) m n.k jr.t Hrw xw stm.w sj	mstr.t
c wsjr (.) m n.k jr.t Hrw jsD;.t=n.f	Hrw q;j
d wsjr (.) m n.k jr.t Hrw xw dr.f sj	jdr
e wsjr (.) jT jr.t Hrw wc.t	wct.t
f wsjr (.) m n.k jr.t nHm=t=n.f m_c stX xnp=n.f sj	xbz.t
g wsjr (.) m n.k jr.t Hrw jz;.t m gb	b?
h wsjr (.) m n.k jr.t Hrw Tpnpn=t=n stX Hr.s	mTpn.t
i wsjr (.) m n.k jr.t Hrw m;gs=t=n.f m_c stX	m;gsW
j wsjr (.) m n.k jr.t nHm=t=n.f m_c stX xnp=n.f sj	xbz.t
a オシリスたる王よ 我汝に運びたり 心膨らますホルスの両眼を ……	////
b オシリスたる王よ 汝に取れ ホルスの目を、それが蕩尽されるのを防げ	腰布
c オシリスたる王よ 汝に取れ 彼が健やかにしたホルスの目を	「ホルスは高し」
d オシリスたる王よ 汝に取れ ホルスの目を、彼がそれを滅ぼすのを防げ	帯
e オシリスたる王よ 受け取れ ホルスの独眼を	ワアテトの尾
f オシリスたる王よ 汝に取れ セトがそれを奪った時セトから救ったホルスの目を	ケブゼトの尾
g オシリスたる王よ 汝に取れ ゲブから護られたホルスの目を	椅子
h オシリスたる王よ 汝に取れ それ故にセトが喜んだホルスの目	メチュペントの剣
i オシリスたる王よ 汝に取れ 彼がセトから奪い取ったホルスの目を	マーゲスの剣
j オシリスたる王よ 汝に取れ セトがそれを奪った時セトから救ったホルスの目を	ケブゼトの尾

これらの節はゼーテにはなく、後に発見された資料を補足したFPTにより補ったものである。次に述べる理由からFPTの節番号に従わず、これらの節を一括して扱った。即ち、前半a~eと後半f~jに、意味上かつ統語形式から見て、A-B-C-B'-A'（またはA）という型が読み取れる、というのがその根拠である。ま

た、各行太字の部分に同音の、斜体字部分に類音の語呂合せがある。これ以降Pyr49までは、衣装・装束の副葬品が捧げられる。

(Pyr41)

第58章

a wsjr (.) | m n.k jr.t Hrw j*b*;=t=n.f jm.s | Db;

第59章

b wsjr (.) | m n.k jr.t Hrw jsns;; sj | sj;.t

第59A章

c wsjr (.) | m n.k jr.t Hrw nH*mm*=t=n.f m_c stX xnp.f | x*bz*.t

a オシリスたる王よ 汝に取れ、それにより彼が踊ったホルスの目を | 尾付腰布 1枚

b オシリスたる王よ 汝に取れ ホルスの目を、それを認めよ | 房飾り付 1枚

c オシリスたる王よ 汝に取れ、セトが奪った時彼から護ったホルスの目を | ケベゼト

ゼーテ底本のNは破損が激しく、供物を表す欄外の単語しか読み取れない。以下、44節を除き48節までは主としてFPTの補遺本文に基づく。また今後は章冒頭のDd mdw「呪文」を転写本文からも削除し、訳出しないことにする。これについては前稿で詳しく触れたので、前稿当該箇所(p.93)を参照されたい。

(Pyr42)

第60章

a ////////////////sww.k Hr jr.t Hrw

b wsjr (.) | rDj=n.j n.k sw jm.f rs j*b*.f jr.k | sSrw nTr

第61章

c wsjr (.) | m n.k xpS n stX fd=n Hrw | sSrw nTr

a ////////////////sww.k ホルスの目の上に

b オシリスたる王よ 私は彼によりそれを汝に与えた 彼の心は汝に注目する | 神の六織り布

c オシリスたる王よ ホルスが裂いたセトの前足を汝に取れ | 神の四織り布

42b,cの供物の区別は文字から得られる情報を翻訳上に生かしたものであるが、実際に語形の違いがあったかどうかは不明である。

(Pyr43)

第62章

a wsjr (.) | オシリスたる王よ
m n.k mw jmj.w jr.t Hrw 汝に取れ ホルスの目の中の水を
m sfxx.k jm.s | Hrs 汝それを逃がすな | ヘレス錫

第62A章

b wsjr (.) | オシリスたる王よ
m n.k jr.t Hrw m;t=n DHwtj mw jmw.s 汝に取れ、その中の水をトトが見たホルスの目を
| Db; ;ms | ジュバー錫 棍棒

(Pyr44)

第63章

a wsjr (N)	オシリスたる王よ
jmz; kw jr z; k Hrw	私は汝を導く、汝の息子ホルスの許へ
b dj n.k sw m X.t n.k	汝のため彼を汝の胎内に置け
c // (N)	…………… 王
mXn jzr Hrs l	メケンの錫 イゼルの錫 ヘレスの錫

(Pyr45)

第64章

a wsjr (.)	オシリスたる王よ
Dsr.k Hr.f m.kw Sp=n.k sw l	彼故に汝は引き離された、見よ汝は彼を滅ぼした
b Dsr	ジェセル錫

第65章

c wsjr (.)	オシリスたる王よ
mr.k sw swt Hrw	汝は彼を愛す、彼がホルス故
Hrs	ヘレス錫

(Pyr46)

第66章

a wsjr (.) sxtj n.k jr.t Hrw xr.k	xt_sx.t
-------------------------------------	---------

第67章

b wsjr (N) m nxrxr.w Hr.k dj n.k sw m c.k	
c	ndsds.w.s mw jwnw_Hrs
a	a オシリスたる王よ 汝のためホルスの目を汝の許に戻せ ケト_セクト錫
b	b オシリスたる王よ 汝の顔を眩ませるな 汝のためそれを汝の手に置け
c	c 汝のために彼らがndsdsしようとも イウス_ヘレス錫

46b 異読：N: nxrxr、Nt: nXrXr。

46c 異読：Nt: ndsds=w.sn n.k。

46c ndsdsは語義不明。他にはPyr1204dに現れる。語根重複を一部に含む共時的レベルで(語幹構成子音を数字で置換えると)n1212型になる動詞語幹はエジプト語において多数例証され、アレンはPT中に24語を数えている。²¹ 通時的観点からは、二つのタイプが想定される。一つは123の第1語基が nのタイプつまりn2323型、一つは語根12j(第3語基が弱子音で、これはしばしば消失する)に語幹形成接辞nを持つタイプつまりn1212型である。意味上の共通点は、nwtwt「躓く」、nhmhm「叫ぶ」、nHrHr「喜ぶ」、ngjgj「ガアガア鳴く」、nTHTH「笑う」、ndbdb「啜る」、ndfdf「滴る」の用例から、擬音擬態語が目につく特徴と言えるが、それとは無関係な語彙も半数を占める。因みにn1212型でないx1212型の動詞にも擬音擬態語と思しき語彙がある。例えば、;gbgb「震える」、jTjTj「羽ばたく」、hnjnj「喜ぶ」、Hcjcj「興奮する」、THnHn「煌く」等。

(Pyr47)

第68章

a wsjr (.)	オシリスたる王よ
m n.k mw jmj.w jr.t Hrw	汝に取れ、ホルスの目の中の水を
h; wsjr (.) pw	おおオシリスたるこの王よ
b m n.k mw jmj.w jr.t Hrw	汝に取れ、ホルスの目の中の水を
mH n.k c.k m Hrs	ヘレス錫で汝の手を汝のため満たせ
(Htm Tw m Hrs)	(ヘレス錫で汝を飾れ)
c Htm.f Tw m nTr jm.k	神として彼が汝に備えるべき、
sfxx jm.f	それを放すな
d z; jm.k	注意せよ
sfxxw jm.f	それを放すな
Hrs	ヘレス錫

47bのNの異文にHtm Tw m Hrsとあり、その後47cの Htm.f Tw m nTr が続いたのか、或いはNtの異文の如く、それを欠いたのか、なぜそのような異文ができたのか、不明である。結果的に節関係の不明瞭さを生じたものの、すべて、上述の節の並列という修辭的技巧に起因するのではなからうか。

47c の訳で「べき」と補ったのは、定形動詞のHtm.fで始まり前置詞句のjm.kで終わる動詞句が直前のHrs錫の修飾句であることを示したものである。このように古代エジプト語あるいはPTにおいては、節 (clause) の修飾関係・接続関係が文法形式により明示されない場合が多いということが、言語解明の大きな難関となっている。明示されない理由は、母音を表記しないというエジプト文字の表記上の特徴が原因となっている場合もあるが、言語構造からして曖昧な場合もある。ここも恐らくは、節の並列に過ぎない可能性がある。文字どおりの訳は「彼は汝を汝により飾る」となるが、その解釈の一つが上の訳である。

(Pyr48)

第69章

a wsjr (.) | m n.k Dbc stX sm;; jr.t Hrw HD.t | sm;

第70章

b wsjr (.) m n.k jr.t Hrw jsHD.t tp Dbc stX Dcm.wj	
a オシリスたる王よ 汝に取れ 白いホルスの目に見せたセトの指を	セマ錫
b オシリスたる王よ 汝に取れ セトの指先を輝かす白いホルスの目を	白金2塊

48b のDbcとDcmとを類音の語呂合せとすることは、牽強付会に過ぎると見えるかもしれない。しかし、誰もが真摯な宗教文書として公認するヘブライ語聖書(旧約聖書)にはこの程度の下手な語呂合せがふんだんに見られる。たとえば、創世記11章9節はba:bel「バビロン」という地名の由来をba:lal「混ぜる」という完全には一致しない類似音で解いているし、同じく創世記19章37-38節では民族名のmo:a:b「モアブ」と、ammo:n「アンモン」とを、それぞれ min 'a:bとben 'ammi: とに由来する、と強引なこじ付けによって解いているのである。その数、枚挙に暇がない程である。²² 語源学を知る近代人にはとうてい納得できないこのような説明が、しかもかなり無理な語呂合せによる説明が、如何にして容認されたのであろうか。ヘブライ語とエジプト語とは言語系統論上も、言語類型論上も近い関係が推測されている。確

かに、厳密な立場に立てば、異なる言語に異なる言語規範が想定されて当然であるが、この二つの文化圏が隣接し、また古来両者間の人と物との行き来が盛んであったことを考慮すれば、少なくとも両者の影響関係の可能性を否定し去ることはできない。故にヘブライ語の宗教文書に見られる言語行為がエジプト語の宗教文書に観察できて不思議ではない。あるいは両者の文化的特性に帰する必要はないのかも知れない。むしろ人類共通の普遍的文化現象の一つとして、同音の共有すなわち本質の共有という、言霊思想にも通じる思想があったと考えるべきかもしれない。もちろん、その根底には行為と音声との何れをも問わない同態感応の思想が横たわっていたであろう。したがって、この程度の相違は、たとえ厳密な宗教文書であれ、否、宗教文書であるからこそ却って呪術的效果を求めて、たとえ完璧な一致を見なくとも許容されたところか真剣に追求されたのだと思われる。ここの例のような、音素配列が前後する程度の逸脱は充分受け入れられたであろうし、好都合なことに、bとmは共に調音位置が同じ両唇音である。エジプト語の内部資料に基づくさらに確かな証明は今後の課題として、PTの中に上述の普遍的文化現象の証拠を求めることは的外れではないと思われる。

(Pyr49)

本節は、底本では完全に破損状態にある。幸い、ゼーテ以降に発見されフォークナーによって補遺として刊行された、象形文字による本文(FPT)が参照できる。ここでは、アレンがさらに棺柩文(Coffin Text)等のその他の資料をも参考にして復元した本文と節番号とに従う。その理由は、前稿の「4章節番号について」という一節において述べた。

第71A章

(Pyr49A: FPT71~71E, FE 49~49+5=Allen, PT 71A)

a	wsjr (.) nDr n.k cfc n xft.k	Dcm
b	wsjr (.) m w;.f m_c.k	w;s
c	wsjr (.) Dsr.t Dsr.t Hr Dbc.wj.f	cb.t
d	wsjr (.) cnx.t cnx.t	mcnx.t
e	wsjr (.) m n.k jr.t Hrw nx;.t m_c ms.w.f	nx;x;
f	wsjr (.) m n.k c n nb.t_Hw.t	
	xw rDj.s sw jr.sn	cw.t
a	オシリスたる王よ 汝の敵のcfc(語義不明)を汝のために掴め	ジャアム錫
b	オシリスたる王よ 汝から彼を遠ざけるな	ワース錫
c	オシリスたる王よ 聖なれ 聖なれ 彼の両指の上で	アプト錫
d	オシリスたる王よ 生きよ 生きよ	ペンダント
e	オシリスたる王よ 彼の子らから守られたホルスの目を汝に取れ	から竿
f	オシリスたる王よ ネフチュスの腕を汝に取れ、 彼女がそれを彼らに与えぬように	アウエト錫

49Aa の本文にはDcmという音連続は現れないものの、D,c,mの個々の音は含まれる(49Aa, 49Ab)。同じことは、49Afのc,w,tにも言える。その他の行には、同じ音連続の語呂合せが見られる。意味上・文法形式上は、49Aaと49Ae, 49Afの前半部との間に(命令形+n.k+目的語)、49Abと49Af後半部との間に(禁止)、49Acと49Adとの間に(古完了形による勸奨法)並行関係が見られる。つまり、概略的に捉えれば

ABCCA'A'B' という型を持つ。

第71B章

(Pyr49B: FPT71F~71I, FE 46+6~49+9=Allen, PT 71B)

g npD cHc p	pD_cHc	かの悪者を殺せ	ペジュ・アケアのケーブ
DHwtj jn sw	??n	トトよ それを運べ	??
h DHwtj jn sw		トトよ それを運べ	
i jmj Dj=n.j n.k sw		私をしてそれを汝に与えさせよ	
dj n.k sw Xr.k		汝のためそれを汝の下に置け	
Twt jr.f	Db;_nTr	それは汝に属す	ジェバー・ネチェルのケーブ
j wsjr (.)		オシリスたる王よ	
nDr n.k s	nw_rwD	それを汝のため掴め	ヌウ・ルジュの弦
k jz Xr wsjr (.)		オシリスたる王と共に去れ	
l jnk gb	gn	私はゲブ	ゲンのケーブ
DHwtj jn sw pD pf	jrj_nTr	トトよ彼を運べ かの殺害者を	イリイ・ネチェルのケーブ
m // pf cHc pn		かの..... この悪者	
pD xtf (.) pn cHc (.) pn		この王の敵を殺せ、この王が立上がるよう	
	pD_cHc		ペジュ・アケアのケーブ

アレンによれば供物nw_rwDは49Biに続くが(A,p.671)、類音(n,D,r,w)の存在から判断して、本来49Bjに続いた筈である。同じ理由に基づき、49Bhに続くDb;_nTrを49Biに、49Biのgnを49B lに移動させるべきかもしれない。この移動によってもその配列の順序が入れ替わらないことも、移動を支持するであろう。問題は、本文中に類音を含む語句が存在しない49Blのjrj_nTrである。nTrという語が現れるのは、本文欄外に供物として刻まれたDb;_nTr, jrj_nTr以外には次項で扱う49Coだけである。もっとも欠落箇所に残っていた可能性が残されている。もし供物の配列の順序を入れ替えることが認められるなら、Db;_nTrに最適な箇所は、Db;とnTrが連続して出現する49Cn-oに続く49Coの欄外が最適であろう。

第71C章

(Pyr49C: Allen, PT 71C; FPTになし)

n nD=n sw Hrw m_c xft.f		彼の敵からホルスはそれを獲った
Db;=n sw Hrw m;t;j.t		タイトからホルスはそれを取戻した
o m;c xrw (N) pn xr nTr.w		この王の声は正しい、神々の前にありて
p jt.n (N) pn wrt.t		この王はウェレト冠を運んだ
xr psD.t c;t jmj.t jwnw		オンの偉大な九神の前へ
q Hrw		ホルスよ
jmj wsjr (N) pn nDr sw		オシリスたるこの王にそれを掴ませよ
r jz Xr (N) pn n pD cHc		この王と共に去れ ペジュ・アケアのケーブのために
s nDr sw		それを掴め
jmj rDj=n.j n.k sw		私をしてそれを汝に与えさせよ
t dj n.k sw Xr.k		汝のためそれを汝の下に置け

m w;.f m_c.k | (subscript) 汝から彼を遠ざけるな | (供物名)

第71D章

(Pyr49D: FPT 57A~I, FE 40+1~40+9=Allen, PT 71D)

u jn n.j jr.tj Hrw	jwn.t	ホルスの両眼を私に運べ	イウエントの弓
jmj bw xr=n.sn jm	xrSt	そこで彼らが倒れた場所を取れ	矢
v jmj sn rDj.t.j n.k	rWD	汝に私が与えたそれらを取れ	弦
dj=n.f sn r t;	nw_rWD	地面にそれらを彼は置いた	ヌウ・ルジュの弦
w wsjr (.)		オシリスたる 王よ	
jn=n.j n.k jr.tj Hrw	jwn.t	私は汝にホルスの両眼を運んだ	イウエントの弓
x /// /// // stX	pD.t セト	ベジュトの弓
Dj.j n// /// jb stX	D/////k ///	与える n.. セトの心を	D...kの弦 ...
y ///// // //k	///kの弦
z /// /// /n nDr=n nb.sn ///	n 彼らの主が掴んだ

(以下、次稿に続く)

注

[略号で示した文献(A,E,FD,FE,FPT)については、前稿を参照されたい。]

¹ Nielsen, K., *Incense in Ancient Israel*, Leiden, 1986, p.109, note 22.

² Allen, J.P., *Middle Egyptian*, Cambridge U.P., 2000, Ch.13.

³ これについては、「ピラミッド・テキスト・データベース—Pyr1204を例に—」と題して、第8会西アジア言語研究会(2001.12.1、於京都産業大学)において口頭発表した。(副題は当日追加)

⁴ イヴ・ボンヌフォワ編『世界神話大辞典』大修館書店2001年、pp.108-132「エジプトの神話・宗教」参照。同書(p.124)に植物神オシリスの象徴的写真がある。

⁵ Sethe, K., *Zur Geschichte der Einbalsamierung bei den Ägyptern und einiger damit verbundener Bräuche*, in *Leipziger und Berliner Akademieschriften* (1902-1934), Leipzig, 1976. S.596.

⁶ Lucas, A., *Ancient Egyptian Materials and Industries*⁴, (rev. by J.R.Harris), London, 1989, ミイラ製作全般についてはpp.270-326、特にナトロンについてはpp.278-323、最古の証拠についてはp.271参照。

⁷ 前掲書、pp.80-97.

⁸ 注1上掲書、pp.3-15.

⁹ 国立民族学博物館所蔵中西コレクション中のコプト語手書き文書：資料ID c942361816、標本ID 156。出現箇所：1:1, 11:7/8, 15:12, 16:2, 16:14。また、libanos「乳香」という語も現れる(15:10)。

¹⁰ これに関連し、拙稿「エジプト文字」(河野六郎・西田龍雄・千野栄一編『世界文字辞典』三省堂2001年所収)を参照されたい。

¹¹ E21,E123,E214参照。他にも、Edgerton, W.F., *Early Egyptian Dialect Interrelationship*, *Bulletin of American Schools of Oriental Research*, 122 (1951), pp.9-21が方言の違いを指摘している。

¹² Lesko, L.H., *Ancient Egyptian Cosmogonies and Cosmology*, in B.E.Shafer (ed.), *Religion in Ancient Egypt*, Cornell U.P., 1991, p.93.

¹³ 注1上掲書、p.8.

¹⁴ ゲルシヨム・ショーレム(高尾利数訳)「ユダヤ教伝承および神秘主義における色とその象徴論」『ユダヤ

教神秘主義』河出書房新社1975、細川孔明「言葉と文化」(西田龍雄編『言語学を学ぶ人のために』世界思想社1998[第13版], pp.158-162.

¹⁵ 注6上掲書、pp.235-243.

¹⁶ なぜなら、‘fresh,green’ (FD)を意味するw;Dという単語の綴りには一般にM13を含むのに反し、この用例は含まないからである。事実、入力済みのPT(約1800節)中のw;Dの全用例数114の中にM13(とその異体字)を含まない用例は、唯1例しかない(M1681a)。しかも、その用例でさえ表音部分は<[w;]D[Dw]>と綴られていて、w;Dとしか転写しようがない。34dと同じ綴り<[wD]w>を持つ用例は皆無である。

¹⁷ 注6上掲書、p.301, p.316.

¹⁸ 注2上掲書、Ch.24.5

¹⁹ 一例として、例えば創世記冒頭の章、例えば第2章18-21節の現代語訳が参考になる。ヘブライ語原文ではごく一般的な等位接続詞による文の連結に過ぎないものが、翻訳では接続詞の効果により緊密な文章構成の物語として現れる。このことは、非難のためではなく、翻訳の避け難い問題として、参考のために指摘するのである。

		月本訳	新共同訳	KJV	BJ
18節	wa	---	---	And	---
19節	wa	---	---	And	---
19節	wa	～て、	～り、	and	et
19節	w	そして、	---	and	---
20節	wa	こうして、	---	And	---
20節	wu:	しかし、	～が、	but	mais,
21節	wa	そこで、	…そこで、	And	Alors
21節	wa	---	---	and	---
21節	wa	～と、	～と、	and	---
21節	wa	～り、	～り、	and	et

月本訳：旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 I 創世記』岩波書店2000[第4刷] (月本昭男訳)。

²⁰ 注2の上掲書、pp.89-90.

²¹ A746.

²² Mercer, S.A.B., *Literary Criticism of the Pyramid Texts*, London, 1956, p.83以下には、PTに見られる多数の語呂合せ、連禱の例が紹介されているが、本稿の諸例への言及が見当たらないので、網羅的なものではないようである。因みに、古典ヘブライ語についてBerlin, A., *The Dynamics of Biblical Parallelism*, Indiana U.P., 1985, p.103以下を参照。

Summary

In this paper I suggested (1) to add a new phonetic value [bj:] to the Code N34, not referred in Gardiner's Sign List, (2) to correct the Faulkner's translation of w;D in Pyr34d from "fresh" to "perfect", and (3) to move a few subscripts in Pyr49B and C.

I also referred a few grammatical differences between Allen and Faulkner, and several other interesting facts concerning paronomasia.

[本稿は、平成13年度文部科学省研究費補助金(基盤研究C2)による研究成果の一部である。]